異世界を跨いだ者たちの物語

セルス

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

この時代に訳もない殺人事件が平和そうな世間で裏腹に起きていた。

だがその内容が公にされることがなかった。

これにより普段通りの生活を送る表側の世界と、普段とはかけ離れた裏側の世界に住まう者たちが同時に存在し、隔たれた見えない壁で交錯していた。

表側の世界から裏側の世界にきたものは、もう二度と普段の生活を送ることが出来ない。送れたとしても平和のために戦わなければならない……。よって裏側の世界にある選択肢は生きるか死ぬか……。その二つしか選べない。

この物語はそんな少年少女各々のサイドごとにストーリが展開され、様々な異世界に行ったり、様々な原作に関与していくいわば、主役が章ごとに変わる複雑な多重クロスオーバーストーリーである。

この小説読む上での注意事項

※この物語は各弾ごとに物語の主人公、メインヒロインが変わっていきます。

※この小説で出てくるキャラクターはオリキャラ含めて多数存在します。非常に複雑ですので注意してください。

※この物語には、訳が解らない業界用語や、難しい漢字が多く印字されます。なるべく解りやすいように訳してはいきますが、そのこと

をご了承の上、読んでいってください。
※この物語の話の更新は順番通りに行いません。注意してください。
※二次創作の元になったアニメ、ゲームのキャラクターの性格、言動は一応原作通りに再現させるよう努力しますが、キャラ崩壊があるかもしれません。ご了承ください。
現在共演予定の作品概要
任天堂関係（星のカービィシリーズなど）・角川関係（戦場のヴァルキュリアシリーズ、魔法少女リリカルなのはシリーズなど）・テイルズシリーズ・集英社関係・ラブライブシリーズ・アイドルマスターシリーズ・ＴＹＰＥ　ＭＯＯＮ関係（月姫・空の境界など）・ＭＦ文庫関係（神様家族など）

目次

表側と裏側の現実
幼馴染との再会 ―― 1
それぞれの気持ち（舞台少女戦争）
物語はここから始まる ―― 18

表側と裏側の現実
幼馴染との再会

俺の両親と弟は何者かに連れ攫われた……。何処の誰だかはわからない。

あの刑事に尋ねても何も話してくれない。でもあの刑事は俺の肩を叩き、「心配いらない。君の両親と弟は生きている」と言ってくれた。

だが正直言ってそんな望みがないのは自分だって解っていた。連れ去った犯人は金目的の誘拐ではなかったからだ。

あの刑事は生きていると言ってくれているが、自分は密かに親と弟は死んでもう戻ってこないと抱いていた。

唯一生き残った兄貴もそれを解っていたのだろうか……あの刑事にどういう犯人が連れ去ったんだと問い詰めていたのだが……当然何も言わなかった。

そんな事が原因なのだろう……。兄貴はしばらくして何も言わずに出て行って連絡すら寄越さなくなったのだ。

結果的に俺はこの家で孤独を押し殺しながらも独りで暮らし続けた。本当ならば親戚の家に住まわしてもらうのが妥当だろうが、拒み続けた。希望に半信半疑だったからだ。

だからこそこの家で親が帰ってくるのを待っていたのだ。

だがその一方で、何時も自分に対して思えるのはもう弱い気持ちを一切も捨て去ろうと自分で言い聞かせていたことだ。

もしあそこで根性さえあれば親や弟たちを連れさらわれずに済んだのかもしれない。その事を毎日考えてしょうがなかった。

だから自分はこの中学生最後の夏休みの内に生まれ変わることを決意した。それは一般人が到底考える事が出来ないもので、普通の野次馬（表世界）から裏世界への入口に踏み込む切欠になったものだった。

静岡県に存在する自殺名所で、一度入ったら二度と出てこられない

とされている青樹ヶ原樹海(あおきがはらじゅかい)を突っ切るということを実行したのだ。
期間は夏休み中……。荷物の持込などを必要最低限にした状態で樹海に入り、出られる日まで樹海で過ごし反対方向の出口に出ること……。
そんなことといきなりやっても到底出来るはずがないと思いながらもその感情を自分自身で押し殺し、青樹ヶ原樹海横断を夏休み一日目で決行した。
最初は樹海の中を足でただただひたすら歩き続けた。到達日はいつになるかわからない状態にも関わらず、2ℓのペットボトル一杯に入った水を一時間歩くことに一滴ずず飲んで歩き続けた。
こんなことをしていたため、時に脱水症状により手足の感覚がなくなり、樹海の中で気を失っていたことが数回もあったくらいだ。
寝るときなんて毛布なんてない。雑草の上で横になったり、安定した太い木の上まで登って寝た。最初は全く疲れはとれなかったが、何回も寝てると徐々に疲れがとれてくる感じがした。
食材は基本木の実や雑草がメインだった。動物は捕まえたことはあったが、あくまで反射神経、頭脳、脚力を鍛える目的だけで捕まえたら即座に逃してあげた。
歩くのに慣れてくると、今度は腕力、握力などの身体全体を鍛える修行も同時に進行させた。
寝る前の筋肉トレーニング、木の枝を使った筋肉トレーニング、木と木を跳び移る特訓、肉食動物の熊相手の特訓など……。
とにかく身体中が使えればそれでよかった。青木ヶ原樹海の中でやった自我訓練は数えきれないくらいだ。
もちろん様々な障害にぶち当たった、身体中を大怪我したり、足を捻ったり、大怪我もした。そんなことが長く続いて、正直帰りたいと幾度(いくど)も思って泣いたりしても……もう後には戻れないどころか、帰る道すらわからない。
ただ前に進むしかなかった……唯一(ゆいいつ)選択肢にあったのは生きるか死ねか、それだけだった。
樹海で入っていた時に使わなかった筋肉は一つも無かった。俺は

限界まで自分のありとあらゆる部分を使った。
それが４週間も永遠も続き、ようやく樹海の反対方向に出ることが出来た。樹海に入る前の自分はもういなかった。そこにいたのは、叶うはずが無かったとされる理想の自分であった……。

残暑（ざんしょ）が残った９月１日。あの無謀な樹海横断から４日が過ぎた。俺は進路について悩んでいた。何せ兄貴も中学卒業後に出て行ってしまったのだから。このままこの近辺の高校に通うかはたまたこの地を出て新しい生活を送るかどうか迷っていたのだ。
朝６時に起床した俺は何時も通りに朝食を作り食し、顔を洗って歯を磨いて中学の紺色一筋（こんいろひとすじ）の制服に着替えて８時丁度に中学校に向かった。家から中学校までは歩いても数分もかからないため超楽であるのだが、生徒の視線が俺に集中していて気まずかった。
なにせ樹海横断をしたせいか体系も夏休み前よりもだいぶ変わっているし、おまけに外見も変わってしまったものだから皆（みな）は「誰だ？」と思っているかもしれない。
あぁ……自分が変わるのってここまですごいものなのだろうか？
自分のクラスの教室に入ると、俺はすぐさま自分の席に着いた。もちろんクラスのみんなも視線が集中していた。
それどころか、途中担任の先生に職員室へ呼び出しくらうし、休み時間や昼休み、放課後の部活動は生徒や部員らに質問攻めされるし……。

学校にいる間、俺に休息が訪れることはなかった。
全く……俺の変わりようがここまで珍しいものなのか？前の自分が可愛そうに思えてきた。そう実感したくらいだ。
まぁそういうことは長い時間を掛けて何とか理解してもらえるのだが、大きく変わったことはもう一つある。
それは自分の動体神経が夏休み入る前と断トツに差があったのだ。
今日は体育の授業が無かったため大人しくしていたし、昼休みに不良生徒に絡まれた時はなるべく悪化させないように言葉を弁えた。もし悪化して相手が手が出すような事態になっていたら、俺の実力が異常なものであったため相手に負傷を負えざる得ないと考えたからだ。
それに中学卒業後まではこの力を出来るだけ使わないことを心に決めていたため、こうゆう事態を避けることに決めたのである。
結果的に不良の絡みはほんの些細なことですんだ。
自分の身体の異常さが確認できたのは放課後の部活動でだ。
うちの部活は足を使う運動が多いのだが、それを行った後は全く疲れが感じられないし汗が額から出ていなかった。
このことが何れ問題になる。さぁてどの様に乗り越えるか……。俺はそのことを考えながら学校の1日を終えて下校の道を進んでいた。
とか思いながらも実は今日の夕飯は残り物を使った炒め物にしようかとも考えたりしていたが……。
家の前まで入るとそこには目を疑う光景が待っていた。それは家の前に少女が立っていたのだ。夏の暑い時期が残るのにその時は風で暑さがかき消された。彼女の黒い髪が風で揺られ、灰色のブレザーと赤いリボン、そして黒と白の短いチェックスカートも風で吹かれていた。いや……スカートはあれがギリギリ見えないほどまで捲れているのだが……。
いやまて……あの子何処かで見たことがあるような……。
すると彼女は俺の存在に気付いたのだろう、俺の方に視線を向いた。そして俺の顔を見るなりしだいに笑顔に変わっていき、彼女の黒

い瞳から涙が滴りだした。
「……やっと出会えた……」
彼女から出た言葉であった。俺は未だに理解が出来なかった。
「……あのぅ。家に御用があるんですか？でも今親がいませんのでまた後日に……!?」
その瞬間だった。彼女自身が持っていた鞄をその場へ落とし、俺の処まで走ってきていきなり身体を抱き合わせたのだ。
急な出来事に俺は混乱を隠せなかった。彼女を引き離そうと思ったが出来なかった。いや引き離すのをやめたのだ。
なぜなら彼女は抱きついて泣いていたのだ。
何か辛い事があったのだろう……。
そして彼女を見ているとあの頃が頭に過ぎった。幼い頃に出会いそして初めて恋した少女の事を……。
何故そのことを思い出したのだろか？だが懐かしく思えた……。
俺は片方に持っていた荷物を放し、彼女の背後に両手を置いて宥めた。周囲からの眼差しを全く気にもせずに……。

俺は彼女がようやく落ち着いた頃、自分の家に連れて行きリビングのテーブル席に座らせた。その後冷蔵庫に残っている冷たい飲み物を取り出してコップに注いで彼女まで運んで出した。
「ありがとう……」
彼女はお礼を言って受け取る。俺は彼女から正対の方向の席に座

る。
「まぁ聞きたいことは色々あるんだけど……。俺と何処かで出会ったことがあるのか？」
俺の言葉に彼女は驚いた顔をして答えた。
「えっ……？私のこと覚えていないの？」
「い……いや……そ……その……最近色々な事があったからな。記憶が曖昧で……」
まずい……唐突のこの質問はやばかったな。と今更思う俺であった。
だがこんな可愛い彼女と何処で……。
「本当に覚えていないの？」
すると彼女が揺さ振りをかけてくる。そして何よりも彼女の顔の距離の近さに俺は視線を背ける。彼女はテーブルから乗り上げちょっと寄ってきたのだ。こんなこと一度も無かった俺にとっては緊張の何も無かった。
「……ごめん。全然どこで会ったのか解らなくて……」
俺は自分の惨めさに情けを感じた。
くそう全然解らねぇ。どうしても思いだせねぇ……。と……。
「そうか……でもそうだよね。私も最初に見て舘くんだってわからなかったもの」
「……」
「年月が経って久々に逢うとここまで変わるんだね」
彼女は席から立ち上がって彼の背後に近寄ってゆっくりと抱き締めた。
「!?」
俺は彼女の行った行為にただただ驚かされた。
「あ…あのぅ」
「どうしたの？」
「いやだって……その……いろいろな意味でそれは不味い様な気が……」
俺にとっての不味い状態はまだ中学生という立場だって言うのに

この恥ずかしい状態、いや恥ずかしいものというものではない。
これは一般の男達にとっての何一つ無い最高の御褒美なものだ。
彼女の見た目は小さく見えるのだが、抱かれている状態でも当たっていることが感じられる。自分の背中にあそこが……。まぁ下着や制服で覆われているのだが……ん？いや待てよ。じゃああの時も……。
「……もしかして舘くん今までこんなことされたことがなかった？」
彼女の言葉に俺は首を頷いた。
「へぇー。そうなんだ」
「……そんなことより。君は一体何者なんだ？俺自身思い当たる所が……」
「言ったでしょ？最近じゃなくて年月が経っているって。まだ私達が幼稚園年長の時にね……」
その彼女が囁いた言葉に俺の頭が再びあの記憶を過ぎらせた。
まさか……。
「……も、もしかして……君は……」
彼女の方を向いて俺はある名前を呼んだ。
「沙耶香なのか……」
俺の言葉に彼女は……。
「改めまして久しぶりね。舘くん」
その言葉を聞いた瞬間、俺はしばらく固着した。そう、彼の記憶の中で唯一初めて女子と友達になってそして初恋をした子であったのだ。

まさかこんな偶然があるのだろうか？
彼女との付き合いは幼稚園の1年間だけであったが、俺が唯一恋ということを知ったものであった。
彼女の両親と家の両親とはとても仲が良く、互いの家に遊びに来るほど親近感を持っていた。
だがそんなことはつかの間、俺と彼女はそれぞれの人生を歩んだ。俺は結局彼女に告白をせずに別れたのだ。
それから彼女の事は色々あったので、もう彼女のことは忘れ、この小学生から中学生までを過ごしてきた。
もう逢うことなんてないと思っていたのに、中学生の最期の時期にこんなふうに再会するなんて……。

しばらく間があったが、テーブルの席を離れてリビングのソファーで彼女と隣同士になって座っていた。
ちなみにこれまで俺として介して来たが、彼女や親友らやは全員「舘」と呼んでいる。これは俺の名字である。しかし名前の方は馬鹿にされそうで言いずらい。
「えぇっと……一応思い当たって言って見たんだけど……本当に沙耶香なんだな？」
まだあの初恋した彼女が今ここにいることが納得出来ずに再度確認する。
「……ちょっと、さすがにしつこいんじゃないかな」
さすがの彼女もこの反応である。
「いやでも……まさかこんなに可愛いくなっていたなんて思わかなかったから」
俺は彼女の反応に申し訳なさそうに答える。彼女は一回ため息を吐いた後、俺の肩にそっと手を添えて、揺すった。
それは彼女がもういいから気にしないでっていう動作であった。
「でもどうして俺の家なんかに？」

俺の言葉に彼女は反応してしばらく黙っていたが、覚悟を決めたように口を開いた。
「……実は……家出してきたのよ」
「家出!?何でまた……」
彼女の回答に俺は驚く。それはそうだ、だって彼の両親と彼女の両親とは仲が良くて一緒だった頃はよく遊んでいたり話していたりしたから……。そんなことする筈がないって……。
彼女はスカートの裾を両手で握り締めて話を続けた。
「私は……中学生から日常茶飯事にあった暴力に耐えてきた……でもこんなことが毎日続いて……」
彼女の瞳から涙が滴り出ていることが俺の目からでも確認できた。
「……耐えられなくなって出てきたと?」
「……うん」
俺は「う～ん、どうしたものか～」と頭を擦る。
正直こんなことがあり得るのだろうか。あんな優しかった彼女の両親が暴力なんて……。
「もうあれから4日経っているんだよね……」
彼女は俺に聞こえないように言っていたかもしれない。たがその言葉は俺にしっかりと聞こえていた。
「……ちょっと待て、4日経っているってどういうことだ?今出てきたんじゃないのか?」
俺は彼女の両肩を握り締める。
「(やばい……つい余計なことを言っちゃった)」
と今更後悔する彼女であった。
「今まで俺の家に来る前は何処で身体を凌いでいたんだ?」
「それは……その……」
彼女の視線が逸れる。すると彼はある記憶の事を思い出した。
「……遠慮しなくてもいいぞ。彼氏の所で泊まってもらったんだろ」
「……うん」
「正直で素直だな」
別の返事を期待していたのに……。

「でもどうして彼氏の家から俺の家へと移る必要があったんだ？」
「そう思うよねぇ」
　天井に視線を向けて彼女は続けていった。
「ちょっと彼の対応に失望しちゃってね……彼に気付かれないように出て来たの」
「……失望か」
　俺も彼女と同じように天井に視線を向けてみる。どうやら彼氏とも何かあったようなので、これ以上の詮索はやめた。
「勝手過ぎるでしょ？私……」
「……いっ！いやっ！そんなことない!!」
　彼女の悲しい顔を見て彼は思いっきり立ち上がって否定する。女の子の悲しい顔なんか見たくないのが一身であった。
「言えない事情が人それぞれあるだろうし……」
　俺は頭を掻きながら再びソファに座って続けて言った。
「自分自身が帰る気になるまでここに住んでもいいぞ」
「え……？」
「な、何だよそのリアクションは……その為に俺の家に来たんじゃないのか？」
「で、でも舘くんの両親も許可無しで勝手に決めるのは……」
「あぁそれだったら心配いらないよ。前にも言ったけど俺の両親は弟を連れて海外に行ってて当分は帰ってこないし……兄貴もどっか勝手に行って全く帰ってこないしね。それに……」
「それに？」
「俺の両親だったらこういことに関してはなんだかんだ言ってもきっと解ってくれると思うしな」
　そうだよな……生きていようがいまいがきっと……。彼はしばらく何も無い白い天井を見つめていた。
「そういえば沙耶香。弟とお兄さんを家に置いていって大丈夫なのか？」
「心配要らないよ。兄さんと浩太は事情で出掛けて留守だから……」
　しだいに彼女から優しい表情に変わっていた。その彼女の表情を

診(み)て、俺はホッとした。
「そうか。じゃあもうこんな話は無しにして晩飯でも作るか……」
そう言って俺は立ち上がってリビングの奥のほうにあるキッチンに向かった。
「え？館くんって料理つくれるの？」
彼女もソファから立ち上がって彼の近くまで歩み寄る。
「まぁな。これでも料理は毎日いつも俺が1人でずっと作っていたからな」
そう言いながら手探(てさぐ)りでレジ袋の中から人参(にんじん)を取り出してそのまま俎板(まないた)に置く。
このまま人参を輪切りにすれば良かったんだが……なぜか今日は上手くいかない。それどころか……
「……あれ？おかしいな……」
いつやったかはわからないが、左手親指を切っていた。そこからは赤い血が滲(にじ)み出ていた。
俺はただただ切った痕を見つめていた。

「……」
「……」
静寂(せいじゃく)な空気に包まれながらも彼女は俺の切った指を手当てしてくれた。
「すまない。どうしてか今日は上手く出来なくて……」

なぜだろう。今日は大したことはしてない筈なのに……。
「……舘くん。手が震えているよ」
「いやっ、そうじゃないんだ。ただ……」
「(私がいて緊張しているんだ。本当に舘くんは相変わらずね……)」
「……」
俺はその時言った彼女の言葉が全く聞き取れなかった。
「……で？料理はどうするの？」
「もちろんやるよ。やるって言ったんだから……」
彼女に美味しいご飯を食べさせなきゃいけない。
彼は立ち上がって再びキッチンの方へ向かおうとする。だが……。
「……いいえ。せっかく腕に処置を施したんだから大人しくして……ね？」
彼女は片腕を伸ばして俺の肩を掴んでそのままソファに座らせた。その勢いで彼女が立ち上がる。
「!?」
彼も余りにの唐突さにただ逆らうだけだった。
「私が美味い料理を作ってあげるから舘くんはテレビでも見て待ってて」
彼女は彼に笑顔を見せた後そのままキッチンへ向かった。
『……なんだ？この違和感は……』
俺は彼女に視線を向ける。彼女は野菜や肉を包丁で切っていたので彼を見向きもしなかった。
『……気のせいか……まさかな……』
俺は彼女の言うとおりにソファに座りなおしてリモコンでテレビをつけて今日のニュースを伺った。
俺は彼女から……何を感じたのだろうか？

懐かしい幼稚園の夢を見た。
最初に彼女と出会った時、なんて可愛く美しんだろうと思った。
笑顔がまた可愛く感じ、心優しい性格だった彼女は、俺にとっては眩しい存在であった。
そんな彼女と最初に会話できたのは、彼女の家族が家へやってきたのが切欠だった。
前にも話したように、俺の両親と彼女の両親は仲が良く、更に弟同士も友人関係であったため、両家族との交流が多かったからだ。
彼女の心情と自分の心情を分かち合えたことで、俺と彼女を友達という関係にまで結びつけた。
それなのに……なんで俺はあの時に……

「……舘くん、起きて。せっかく作ったご飯がさめちゃうよ？」
彼女の囁きと心地良い揺すりに俺はゆっくりと目を開けた。
「……あれ？俺は寝ていたのか？」
そう言って俺はテレビ画面を見る。今はくだらなそうなバラエティー番組がやっている最中であった。
「そうだよ。もうぐっすりね」

まだ眠気が残りつつも、俺はゆっくりと身体を持ちあげた。
「……変だな。最近は規則正しい生活しているのに……」
腕で目を擦りつけて、完全に眠気を覚ます。
「ごめん。夕飯さめちゃった？」
「ううん。さっき完成したばかりだからまだ出来たてだよ」
「そうか……じゃあせっかくご飯を作って貰ったんだから有り難く頂こうかな」
そう言って俺は座っていたソファから立ち上がって、自分指定のテーブル位置につく。テーブルにはとても美味しそうな御馳走（ごちそう）が並んでいた。
「……すごいな。これ全部作ったのか？」
テーブルに並んでいた御馳走を見た彼は余りの凄さに驚きを隠せなかった。
「そうよ。一応私、これでも学校で料理研究部の部長をしているんだからね」
「……りょ、りょうりけんきゅうぶ？」
そんな部活動があるなんて初耳だ。
「な、なぁ。前から気にかかっていたんだけど……沙耶香は今どこの中学校に通っているんだ？その制服はここらへんでは見かけないんだけど……」
確かにこの周辺では見に覚えがない制服だ。だいいちブレザーが灰色で、赤のリボン、白をメインで黒のチェック柄のスカートは目立つから直ぐわかる。
まぁ俺が身につけている紺色の長ズボン、ブレザーと赤いネクタイも比じゃないんだが……
「……えぇっと。どうしようかな……」
彼女は一瞬悩んだが、素直に答えた。
「私は邦蓮（ほうれん）学園に通っているけど……今は不登校で……」
私立邦蓮学園、良くニュースやＣＭで取り上げられている学校である。都内の集中している空き家の住宅街一帯を潰して、新たに建てられた中高一貫校で、下手したら有名大学へ推薦で受かるとされるエ

リート校の一つであある。
近年は多子低齢化の影響か、こういったエリート育成の学校が増えている傾向がある。
「邦蓮学園って……エリート学校じゃないか……俺の庶民学校と大違い」
俺が通っているのはとある普通の区立中学校だ。とてもじゃないが比にならない。
なんで男の学校名は載せないのかということをここで思った読者は察してほしい。男の制服から考えればある実在する学校の制服をモチーフにしているのだから実名校なんか書けるはずなんかない。
「舘くんの通っている学校はここからだいぶ近いんだね」
「……まぁここから歩いて1分で着いちゃうからな」
俺の家からでも自分の学校の門が確認できるほどだ。
「私は家から電車に乗らなきゃいけないから大変だよ」
「……っていうか家出してから学校に通っていないのはやばいのでは……？」
あそこはただでさえエリート校なんだから下手してサボったら即退学ではないか？
「それは大丈夫。私はある程度単位を取得しているからそこは安心して」
単位取得制か、ますますやばいところだな。
……っていうか沙耶香って無茶苦茶頭良いのかよ……。
このときの俺はまだ勉強は普通に出来るだけで、まだ優等生の類（たぐい）に入っていなかった。
「何か俺の知っていた彼女がどんどん遠ざかって行くような気が……」
俺もこの年で変わったかもしれない。しかし彼女はそれ以上だった。
「そういう舘くんって部活動やっているの？」
「……えっ!?えっと……」
料理研究部って言う部活も初めて聞くが、俺の部活名は言ってわか

るだろうか……。
「俺も部活動はちゃんとやっているよ。紗耶香と同じ部長努めているし……」
「えっ、そうなの？」
「あぁ……。まぁメインの活動は山登りの山岳野外活動部……だけどな」
「……それって登山メインで活動している登山部と同じもの？」
一応知っていたようだった。俺はホッと安心する。
「へぇ……意外ね。舘くんはどっちかというと文化系だと思っていたんだけど……」
「……？今なんか言った？」
「うぅん。何でもない。でも魅力的じゃない。山の頂上まで登りきったら景色がとても綺麗でしょうね」
「まぁな。それに登りきった時の達成感も格別だよ」
そんな会話をしながらも彼は途中で「いただきます」を言った。
折角彼女が丹精込めて作ってくれたできたて料理を冷ましてはいけないと思ったからだ。
「……美味しい？」
彼女は心配そうに尋ねた。
「……美味い」
俺は食べ物を口に入れ込みゆっくりと噛み締めて飲み込んだ後、すぐさまこの気持ちを彼女に伝えたかったからだ。
「そう。よかった」
彼女も嬉しかったのだろう。あの愛くるしい笑顔へと変わった。
「今まで食べてきたものの中で一番美味いかもしれない」
俺は続けて言葉を漏らす。
「そんな大袈裟（おおげさ）に言ってくれなくてもいいよ」
「いいやそんな態とかじゃなくて本当に美味しいんだよ。噛み締めた瞬間に広がるこの旨味……今までこんな風に感じたことがない」
「でも舘くんのお母さんが作った料理の方が美味しいと思うよ。私は未だに舘くんのお母さんには敵（かな）わないよ」

彼女の言葉に俺はあることを思い出す。まだ小さいときに母さんが作ってくれた手料理のことを……。
「そういえばあれからもう一度も俺は母さんのご飯を食べてないな……」
「え？」
彼女には彼の言ったことが聞こえていなかった。
「あっ……いいや。何でもない。とにかく食べよっか」
「そうだね」
こうして彼女との二人の夕食は続いた。

それぞれの気持ち（舞台少女戦争）

物語はここから始まる

私は舞台の主人公に憧れていた。そして私の憧れた夢を叶えるための道すじがはじまった。

最初の頃は上手く喋れないや台詞を忘れてしまう、動きがぎこちないなどの初歩的なミスが多かった。

普段の人の多くは演劇教室の先生の指導のもとでや、両親の何れかが俳優で教育されて育つんだろうけど、お金がなく、俳優と縁がなかったり私は自己流で勉強して改善を計っていった。

上手く喋るように慣らすには発音をワンテンポゆっくりしたり、台詞を忘れてしまわいようにするにはとにかく台本を毎日欠かさず読み込み、動きは学校の休み時間に屋上で振り付けを練習した。また家に帰っては様々な本を読んでは登場人物の思考を考察していた。そしていつか私も自分の物語を自分自身で演じられるように台本を描いていた。

そんなことを小学5年生から繰り返しやってきた成果は中学2年生で現れた。都内の中学演劇コンクールで私が主演を演じきって最優秀賞を受賞した。それを皮切りに私が登場する演目では必ず賞を受賞した。私の惜しまない努力が効を成した瞬間でもあった。私としてはとても嬉しかった……これからも続けていけばきっと夢を現実までに届くと……

中学3年生にあがり、高校の進路を演劇専門の有名な高校にしようと思っていたある日、あの子が突然私たちの演劇部に入部してきた。何しろ両親共々有名な俳優の娘であり、海外を転々しているとか……。

個人演技を観察させてもらい、その実力差ははっきりと解った。

今まで他人の教えなく自分自身で磨いてきた私でさえも、その演技っぷりは言葉に言いあらわせないほど華麗であった。

今回のコンクールは私の自作した物語で、これまでの功績で部長に

なった私と演劇のプロの卵とされるあなたさえいれば確実に華やかな賞を獲(と)れると信じていた……。
本番前のリハーサルであの出来事があるまでは……。

現在の私はというと……。
「えっと……優花？」
御鶴来(みつるぎ)　優花(ゆか)は苦い過去を久々に思い出していたが、親友の久丘(ひさおか)天音(あまね)の声に我(われ)へと還(かえ)る。
「あっ……ごめんなさい。途中から全く聞いていなかった」
優花は軽く彼女に会釈(えしゃく)をする。はぁ……、何でまたこんなタイミングで嫌な事を思い出したのだろうか……。
「大丈夫？また最近だんまりすることがあるけど、疲れてない？」
天音は高校1年生のときからの親友であり、同じ演劇部を切り守する仲間である。彼女はたまに突拍子(とっぴょうし)のない動作があるけど、演技としては優秀である。
「大丈夫よ。こんなのいつものことだし……」
私は中学時代と同様、この学校でも演劇部の部長を努めている。た

だ過去に夢を見ていた演劇専門の高校ではなく、そこそこ有名で名のしれた中高一貫校に優等生で編入しただけである。
ただ夢を諦めきれなかった私はこの学校で夢を成し遂げるために……。
「それにそんなことも言ってられないわよ。功績を出さないと部費が出ないしんだしね」
私達の部活の功績は私と天音が組んだことにより、徐々に名が知れ渡るようになった。
「本当だよねぇ。うちの学校の生徒会長ってなんであんな冷酷なのかな……」
この学校の生徒の代表である生徒会長は、「冷酷だ」とか、「ロボットみたい」だとかの悪い印象が多く出回っている。私も部費についての相談で何度も顔を合わせているが、実際はそうでもない。っていうかそんなこと誰から聞いたの？と思うくらいだ。
私は「まぁトップの人はあれだから今この学校は優等でいられるからしょうがないんじゃない？」と御託並べて聞き流す。
私は彼女についてはある程度知っているからなんだけど……。
「で話を戻すけど、今日の部活内容はどうする？」
「そうね……せっかくだから部室で出来る模擬芝居をやろうかなと考えているけど……」
天音は生徒会長の話題からすぐ部活の話題へと戻した。彼女は私と同じで噂よりか部活動の方を大事にする。だから私達は親友になれたのである。
「さすが内のエースは考え方が違うね～」
「それは褒めているのかしら？」
私達は互いに顔を合わせて微笑む。今日の放課後も楽しい部活動になりそう。
そんなことを思った矢先だった。
「御鶴来さん」
私達の空間に侵入する鋭いような声が響く。この声は紛れもなく朝礼や生徒会室で聞く声である。

天音も「ゲッ?!生徒会長がなんで……」と声を挙げる。一瞬彼女は天音に鋭い目つきで見つめた後、私の方へと目を向ける。
「部費についてお話がありますので、生徒会長室に来てもらってもよろしいですか?」
私は自分の座っていた椅子から立ち上がり天音に「ちょっと話してくるから」と告げて彼女の後を追うように教室を出ていった。
正直天音から「大丈夫?一緒に行こうか?」と心配されたが、私は「大丈夫だから」と笑顔で言った。

私達が通う私立虹ケ咲学園は中高一貫校であり、成績面では私立法蓮学園などと同様上位に立つ学校である。
制服は春、秋、冬用と夏用で容姿が異なる。春、秋、冬用はグレーのチェック柄の白地スカートを履き、各学年に応じたリボンタイを付けて黒いブレザーを羽織っている。一方で夏用は白地のスカートから黒地に変わり、ブラウスが水色とリボンも各学年に応じたリボンよりも淡い色のものに変更となる。

かつては国際展示場として使われていた建物を学校用に改良し、私立Ｕ（ユー）Ｔ（ティー）Ｘ（エックス）学園やフロンティア芸術学園などと同様に先進的な教育プログラムや設備が組まれている。また自由な校風と豊富な専攻があるのもこの学校の魅力である。

ただ魅力や規模の凄さとは裏腹に、他校で才能がありそうな生徒を引き込んでいるという経緯もあり、他校によっては反感を抱かせている部分もある。

そんな色々有名な私立虹ヶ咲学園の生徒達を取りまとめている生徒会長は生半可（なまはんか）な覚悟ではなれない。その生徒会長を精一杯努めている彼女は、言葉に言い表せないほどの凄さを持っている。

私は「失礼します」と一礼をし、彼女の後に続いて生徒会室へと入る。その後生徒会長に「座ってください」という指示で、生徒会長が座る席に近い椅子へと座る。

「部活の予算のお話をする前に、お伝えしたいことがあります。よろしいでしょうか？」

会長である彼女も自分が定位置で仕事している椅子へと座る。

「先週の照明配置についてはありがとうございました」

読者の皆様はなぜ会長である彼女が優花に対してお礼を言っているかわからないだろう。実は生徒会長である中川（なかがわ）　菜々（なな）は生徒会長の一面ともう一つ別の一面の持つ。その別の一面を持っている時に優花とスポットライトの当てる角度と距離のアドバイスをもらっていたのだ。優花は台本の製作や演技の他、演技を綺麗（きれい）に見せるための照明の配置、小道具の新調も自ら率先（そっせん）してやっていたため、そういった舞台での小道具の配置も得意であった。

ん？照明配置ってあの時の……。

「すみません。どうしてもそれだけはお礼をしたくて」

その当初は照明機材だけを貸してあげて、私も興味本位で口を出しただけなのに……、彼女はいつの間にか私を信頼して舞台の照明の切替タイミングなども全て活用してくれた。

本番が終わった後、私は急用で直ぐ寮に帰ってしまったのだが、またこうして改めてお礼を言ってもらえると生徒会長の噂なんて全部

でっち上げであることがわかる。
「いいのよ別に、困っている人を助けるのは人として当然のことだから」
私も舞台での経験をアイドルステージに活かせて良かったと思っているから満足だ。
まぁちょっと生徒会長の別の一面があったのは驚きだが……。
「でも驚いたわ。まさか生徒会長さんが内の学校のスクールアイドルだったなんてね」
話の焦点はどうしてもそこに行ってしまう。私と最初に出会ったのは優木せつ菜としての彼女であった。
初めて顔合わせた当初は生徒会長なんて思いもしなかったのだが、本人も生徒会長の仕事とスクールアイドルの活動を両立してやっていて繁忙期だったため、隠し通せることが出来ないと覚悟を決めて私だけに自分の正体を明かしたのである。
優美の言葉に菜々は辺りを見回す。
「このことについてはくれぐれも内密にしてください」
これは彼女の正体を知った時にも言われた。正体を秘密にしてほしいということから、何かしらの大きな事情を抱えているには違いない。
「心配しないで。そんな人の秘密を暴露できるものじゃないから」
私も虹ヶ咲学園に入学するまで色々あった。だからそういう他人の秘密は詮索しないし、ましてや相手の秘密を暴露するなんての烏滸がましいこと出来るはずがない。
「だけど時と場所によって名前の呼び方を間違えそうになるのはちょっと難点かしらね……」
ただ生徒会長とスクールアイドルの2つの顔を持つ彼女にはまだ慣れていないため、名前を下手したらごっちゃにしてしまうかもしれないという不安がある。
優美は不安げに言うと菜々は真剣な眼差しで私の目を見つめる。
「名前も間違えないようお願いします。生徒会長の時は……」
「中川菜々さん……」

「スクールアイドルの時は……」
「優木せつ菜さん……よね？」
「大丈夫そうですね」
私は「ホッ」と安堵する。まだ正直不安が残るが慣れるしかない。舞台での台詞を覚えるよりかはだいぶマシだ。
菜々は黙々と部活動の活動項目の書類を読んでいく。
「そういえば昨日の入部届の中身を確認したんだけど、
1年生の国際交流学科の桜坂しずくって子、あなたのスクールアイドル同好会のメンバーじゃなかった？なんでその子が私達の演劇部に……」
優美は入部リストにあった名前を思い出し、菜々へと告げる。
最初その子の名前を聞いた瞬間、彼女の手の動きが止まった。
「……そうですか。桜坂しずくさんがですか……」
一瞬であったが、彼女の表情が曇ったと私は感じた。スクールアイドル同好会の部員間で何かあったのだろうか……？
「優花さん。桜坂しずくさんのことしばらくお願いしてもよろしいですか？」
菜々は手を再び動かし始める。さっきの放った言葉と表情は生徒会長菜々としてでの彼女ではなく、スクールアイドルせつ菜としての彼女の頼み事であった。
「しばらくお願いするって……スクールアイドル同好会の方はどうするの？」
彼女のスクールアイドル活動を一回だけ拝見させてもらったが、とても演劇部との両立なんて無理に思える感じがした。
「スクールアイドル同好会についてはしばらく休部しています。また特に動きがない場合は廃部の方も視野に入れています……」
彼女の発言した言葉の数々に嘘はなかった。廃部って言わなかった……自分が努力している項目の部活なのに……。
「廃部って……そんなことしたらスクールアイドルのあなたは……」
私は不安げに言う。彼女の舞台は1回しか見ていないのだが、凄い活気があった。別の舞台といえど……私自身も共感出来た。それな

のに何故……。
「特に動きがなかった場合の話ですよ」
特に動きがなかったらって……。
「一体何があったの？」
菜々の目線が下を向く。
「……すみません。優美さんには同好会内に起きたことはご相談出来ません。これは私達スクールアイドル同好会の中での問題ですので……」
そして続けて……。
「ただスクールアイドル同好会を休部している間の彼女の居場所が必要なんです……お願い出来ませんか？」
私と彼女は親友と認め合っていない。しかし私と彼女は一回の舞台を築き上げた仲間である。いや……。
「……わかったわ。あなたなりの考え方があるみたいだから。これ以上の詮索はしないわ」
それを親友ともいうかもしれないわね。
「ありがとうございます。お詫びも含めてではありますが、演劇部の部費も出来る限り多く廻すように努力しますので……」
「なんか賄賂もらうみたいで気が乗らないけど……」
優美は苦笑いを浮かべて椅子から立ち上がり、「じゃあ私は午後の授業を受けるから」と告げて生徒会室から出ようとする。
「御鶴来さん、もしお時間がありましたら桜坂さんの演技の方を見てもらってもよろしいですか？」
菜々からの言葉に優美は耳を傾ける。
「きっと素晴らしいものを見せてくれるので」
私は「わかった。考えておく」と彼女に告げて生徒会室を後にした。

放課後の部活動が本格的に始まった。私達演劇部も部室内で演技の練習をしている頃……

「……ねぇ。私達も入らなくて大丈夫なの？」

天音と優花は演劇部の部室の隣の物置部屋にいた。

「ごめんね、天音。ちょっと演劇部に入部する子が気になったからちょっとね……」

天音は「それだったらいいけど」と口籠(くちごも)る。本来であれば私一人で彼女を部活動に参加させるべきだろうが……。

菜々の最後に言った言葉がどうしても気になる……。

桜坂しずくっと言う子はそこまで演技にセンスがあるのだろうか？

それが気がかりで演技を互いに認め合った天音と一緒に拝見(はいけん)することにしたのだ。

「来たみたいね……」

引き戸の外からスタッスタッとシューズの音が近づいてきている。そして足音が消えた瞬間、ゆっくりと引き戸が開いた。

「あの、こちらの部屋でよろしいでしょうか？」

リボンタイは黄色に装飾が緑色、間違いなく一年生……。

「えぇ、大丈夫よ。ごめんなさいね、無理言って呼び出しちゃって……」

しずくは彼女達の近くまで歩み寄る。
「……えっ、この子は確か……」
天音は優美に対してアイコンタクトをとる。私は笑顔でそれを返した。
「桜坂しずくと申します。よろしくお願いします……」
丁寧なお辞儀とか、身体の動作から舞台に立っていたか否かの判断が私にはわかる。彼女は舞台へ立った経験がある……。
「私は演劇部の部長を努めています、御鶴来優花です」
しかもこの感じ……。
「同じく演劇部で副部長をしています。久丘天音です」
私よりも舞台への経験が根深い……。
「えっと、御鶴来部長と久丘先輩……ですね。改めてよろしくお願いします！」
まるで中学時代のあいつと同じような感じ……。
「急に来てなんだけど……あなたの演技を見せてくれないかしら？」
「えっ……？」
優美の言葉に驚いたのはしずくではなく、天音であった。
「ちょっと部長……？まだ入るかわからない子なのにいきなりそれは……」
天音と私は入部届を目に通しているから知っている。彼女はスクールアイドル同好会に入部している子、そんな子が私達の部活に入るのか不安だったのだろう。
「はい。どういった内容にすればよろしいですか？」
しずくは意外にあっさりとその要件を受け入れる。私は菜々から全て聞いているため、受け入れることぐらいはわかっていた。
「あなたが印象に残っている場面で好きなところ、何か一つでいいかしら？」
私は彼女に課題を告げると、しずくはしばらく考え込む仕草をとる。
「わかりました」
イメージが整え終えたのか、彼女はせすじのばした。

「では始めます」
しずくによる迫真の一人芝居が始まった。

私は作文用紙に向かって考え込んでいた。中学時代最期になるだろうコンクールでやる演目をどうしようかと……。
「御鶴来さん。もう帰宅時間ですよ」
教室で1人考え込む私に、練習から着替え終えた彼女が私に声をかける。
「……待って。もうちょっとでイメージ出来るところなの……」
私はとにかくここから離れたくなかった。私はただひたすら原稿用紙に面を向かう。
「……嘘ですね」
彼女の思いがけない言葉に私の心は躓いた。
「なっ！嘘な訳ないでしょ！」
私は賺さず反論をする。
「いいえ。私には全てお見通しですよ。あなたの今の心情は、イメージ出来ずにいて、ただここから動きたくないと……」

彼女の言葉1つ1つが私の心に響く。当に正論であった。
「グッ……なんであなたにはそこまでお見通しなの？まだ出会ってそんな経っていないのに……」
普通はそんなこと幼馴染(おさなじ)みとか親友とかしかわからないはず。
「私は何れか大きな舞台へ立つ者として当然の身構えです」
「それ理由になっていないわよ！」
全く人の心を読まれるのはいい気分じゃない。もう今日考えるのはやめよっかな～と内心思った。彼女は微かな笑みを浮かべた。
「どうでしたか？私の迫真の言葉は？」
「えっ？」
私はもう原稿に向き合うのはやめて、彼女と目を合わせて会話していた。あっ、そういうことか……。
彼女は私のことを思って……。
「……なんか悪いわね。凄く思い悩んでいたわ」
私は席から立ち上がって、下校する準備をする。
「御鶴来さんは舞台へかける想いは普段の行動を観ていてもわかります。ただあまり思いつめても台本は浮かばないし、演技も思い通りに上手くいかなくなってしまいます」
「まぁ……確かにそうね……」
私は彼女の言葉に納得する。
「まだ舞台まで時間があるんですから、ゆっくりと考えていきましょう」
彼女の言葉を聞いて私も安心した。やっぱり今回のコンクールはいいものにしたい。そのためにも……。
「あなたの言った通りね。取り敢えず家で考えようかしら……」
私は机に置いてあったものを鞄に仕舞い込んだ。ゆっくりと焦らず……気を落ち着かせて……。
「御鶴来さん。宜しければ帰り道ちょっと付き合ってもらってよろしいですか？」
彼女の急な誘いに私は思わず不意をつかれたような感じがした。
「学校の最寄り駅付近に出来た新しいケーキ屋さんなんですけど、そ

このバームクーヘンがとても美味しいんですよ」
私は最寄り駅から反対側に住んでいるので、そういう事に関しては無頓着であった。
「へぇ……そうなんだ……」
どうせ帰っても題目がすぐ浮かぶはずがないし、気分転換ということを兼ねるなら……。それに彼女のことをもっと知りたい……。断る理由なんてない。
「じゃあお言葉に甘えて同行しようかしら？名が高い天堂真矢の舌を唸らせるバームクーヘンを食べに……」
優美は彼女と一緒に彼女のオススメのケーキ屋に行くことになった。

「……」
「……如何（いかが）でしたでしょうか？」
しずくは迫真の演技を終えて基の位置と体制を戻す。
「いや、如何でしたかって……」
天音は唖然としていた。これは素人が演じるものじゃない。経験がある者の演じ方だ。
「す、凄いじゃないあなた！台詞に感情もこもっているし……動きも軽やかだったし……ねぇ優美！」
天音は優美に言葉を振る。
「優美？」

彼女は真剣な眼差しで観ていたが、なんか顔つきが怖かった。
「…っ!? ごめんなさい。あまりに素晴らしかったからつい見惚れちゃった……」
天音の投げかけに優美は表情を和らげた。はぁ……私ってばまた過去を思い出して……。
「有難う御座います！」
しずくの演技はその人に成り切るれるような感情と気持ちが入っている。動作もどこか美しさが込められている。演技では上等者だ、だからこそ……
「でもしずくさん。スクールアイドル同好会の方にも入部しているのに……演劇部の掛け持ち、大丈夫なの？」
優美の投げかけに彼女は表情を曇らせる。
「……言われてみればそうだよね。こんな上手なら下手したら次の舞台の選抜に選ばれるかもしれないのに……」
しずくの表情から観てスクールアイドル同好会内で何があったのかは間違いない。しかし生徒会長である菜々からは何も聞き出せなかった。
しずくからも出来れば詮索するつもりはない。だけど掛け持ちするからには覚悟があるのか確認をしたかったのだ。
「無理して言うことはないわ。ただ出来るなら演劇部の掛け持ちをしようと思った理由を聞きたくてね……」
優美の優しい声かけに、しずくは覚悟を決めた。
「……実は……」
彼女から聞いた内容はこうだ。
最初はスクールアイドル同好会の活動を上手くやっていたそうだ。
しかし部活をやっていくにつれて自分と他人とで目指しているものが異なったため、自分の主張が言えなくなってしまい、同好会へ顔を出せなくなったそう……。
だけどスクールアイドル自体は諦め切れず、なんとかスクールアイドル同好会に戻ってやり直したいと考えている彼女は、演劇部に入部

することで自分自身にケジメをつけさせるためだということだ。
「……そういう事情があったんだね」
彼女の入部リストには、私立青藍学園からの編入と記載されていた。
私立青藍学園は文化系の部活に力を入れている学校である。
私も2年生へ進学する前に、演劇のプロの卵が青藍学園へ推薦したと噂で聞いたが、その器は彼女であることは間違いないと演技を観たことで実感していた。
「じゃあ演劇部に入ろうと思ったのはスクールアイドルとしての自分を磨き直すためでもあるんだ」
天音の優しい問いかけにしずくは頷き、返事をする。
「……はい」
菜々自ら聞けなかったことはこれだったのね……。多分自分のスクールアイドルとしての押し問答が貫けなかったからなのだろうか。
もしそうだとしたら私も共感出来る。私も過去にあったから……。
「事情はわかったわ……」
あなたの約束、護ることにするわ。
「あなたの入部届は明日生徒会長へ提出します。ただしスクールアイドル同好会の活動を最優先としてやってください。いいね？」
「は、はい！」
優美のこの約束事に天音は軽くあしらう。
「え～。せっかく演技の才能があるのに～」
確かに、彼女の演技力も素晴らしい。演劇部としても欲しい。過去の失敗を埋め合わせしたい。だから……。
「でも万一のことがあったらあなたにも舞台に立ってもらうけど……それでもいい？」
優美のお願いに彼女は……。
「そんなめっそうもないです！私はもう演劇部の一員です！その時はちゃんとお伝えしてくださいね。御鶴来部長」
「ありがとう」
こうして虹ヶ咲学園演劇部に桜坂しずくが入部したのであった。

私は昨日の放課後のことを生徒会長である菜々に報告していた。
「桜坂さんの方はしばらく私達演劇部の方で面倒を見させてもらいます」
私は承認印を押したしずくの入部届を菜々へと渡す。
「だけどスクールアイドル同好会の活動再開の動きがあれば私の方に教えていただけませんか？中川……いや、せつ菜さんでいいかしらね」
私は付け加えに彼女に告げ口をする。
「本当に優美さんには色々ご迷惑をおかけしてすみません」
菜々の平謝りに優美は「別に気にしないで」とあしらう。
「桜坂さんって舞台を目指している子だったのね……」
「はい。彼女はスクールアイドル活動で得た経験を生かして演劇家を目指すそうです」
そういうことだったのね。だから私達の学校に……。
「……」
「優美さん？」
結局演技は似ているだけ……全くの赤の他人、私がただ思いつめて

いるだけ……。
「……なんて言うかしらね、桜坂さんの演技を見ていたら中学時代のことを思い出しちゃってね……」
私は微かに呟いた。菜々には聞きとりづらくしたため、彼女は「今何かおっしゃいましたか？」と尋ねる。
「……ごめんなさい。そういう事だからお願いしますね。中川会長」
私は椅子から立ち上がる。
「御鶴来さん。もう一ついいですか？」
私は「何かしら？」と彼女に視線を向ける。菜々は机の引き出しを開けてある書類を私に差し出した。
「聖翔音楽学院の生徒会長から御鶴来部長率いる演劇部と聖翔音楽学院９９期生の共同演習のお誘いが来ているのですが……」
聖翔音楽学院という言葉を聞いた瞬間、私の脳裏に嫌な記憶が過った。９９期生には確かあいつがいる。何故こんな時に……。
「聖翔音楽学院は演劇に力を入れている学校で、中でも９９期の学生の演技が素晴らしいと聞いてます」
冗談じゃない。私とあいつの共演はもうあり得ない。私の舞台はあいつに……。
私はしばらく固まっていたが、深呼吸して冷静な口調で言った。
「ごめんなさい。今は繁忙期ではないけど私は台本作りで忙しいの。それに来月は法蓮学園との共同演習もあるし……。適当に断ってもらえないかしら？」
「えっ、ですが……」
菜々が更に打ってかかろうとした瞬間、菜々の口調が止まる。
優美の表情が険しかったのだ。何か嫌な事を思い出したかのように……。
私はこれ以上の言及はしなかった。彼女は私の頼みを聞いてくれた。じゃあ私も……。
「……わかりました。では私から聖翔音楽学院の生徒会長にお断りの連絡を入れておきます」
「ごめんなさい、菜々……」

彼女は私にそう呟いた。